

# 観光再興

第2部 脱却 ③

英国発祥の歩くことを 楽しむための道を意味する。公共投資による「ハコモノ」頼みの見直しを 迫られている地方にとっ て、お金をかけずに取り は著名なレジャー施設の

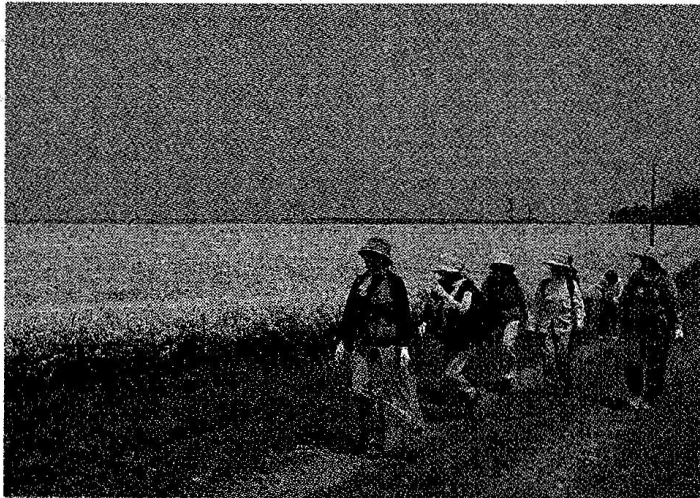
## フットパス

# 低予算官民が熱視線

町のウヨロ川や雄大な牧草地を巡る根室のコースも知られ、「一度ゆっくり歩いてみたい」という愛好家が増えている。 JTB北海道も団塊世代向けの体験型旅行の新商品「北海道知的探訪」を開発し、根室ツアーなどを企画。〇八年度は根室と稚内の二コースに増やし、高齢化社会を見据えて健康増進につながる気軽な旅として売り込んでいる。

るフットパス。コースの整備と、それを楽しむ催しが道内で増えている。推進する全道フットパス・ネットワーク準備会によると、二〇〇二年ごろから普及し始め、現在は三十地区に約六十コースが整う。年間延べ数千人の愛好家があり、道も北海道洞爺湖サミット後の観光振興策の目玉として十万余のコース整備を掲げる。

「美しい風景を自分の時間でゆっくり楽しむ時間も。歩くのは健康にもいいしね」。五月下旬、滝川市江部乙で行われた自然愛好団体主催のフットパスツアー。仲間とともに丘陵に点在する菜の花畑を巡る約十三キロを四時間余りで歩いた札幌市の伊藤麻子さん(左)は気持ちよさをうに汗をぬぐった。



咲き誇る菜の花畑を巡る滝川市江部乙のフットパスツアー。途中の農家でグリーンアスパラを購入する参加者も

組めるフットパスは新たな観光資源になりえる。

フットパスの整備には既存の林道や散策路を活用するため、案内板設置や地図の作製程度しか出費はない。コースの維持管理もボランティアに任せるため、豊かな自然に恵まれた道内で真っ先に普及が進みそうだ。

北限のフナ林で知られる後志管内黒松内町でも官民が手を携えて〇四年から整備に着手。未舗装の町道などを活用して案内板の設置などで二十

の三コースを設営。人

ない農村で、フットパス関連の予算は年数十万円にとどまるが、年二、三回のフットパス体験会には毎回町内外から四十

六十人が集まり活気づく。八月には英国から専門家を招き国際フォーラムを開催する。同町は「マチの財産として認知度も高まってきた」とし、札幌など都市圏との間での交流人口拡大に期待する。

道内の旗振り役を務める、環境市民団体エコー・ネットワークの小川巖代表は「発祥の英国では、十五二十キロを、各地に宿泊しながら数日ばかりで歩くため、経済効果も期待できる」と話している。

眺められる胆振管内白老